



天 と 地

source message

1 . 人が真の幸せを得る、

2 . どんな高い壁も、

3 . 『金色の丘』に立ち、（イエス・キリスト）

4 . 仏弟子の一步

5 . 娑毗羅（しゃびら）

6 . 祇園精舎の鐘の音、

7 . 古に憂い、託すもの

あとがき

人が真の幸せを得る、

人が真の幸せを得る、

真に命をこの世界で輝かせるためには、

その人を専属で守っている、

守護の神霊との協力が絶対に必要となってくる。

個人の方だけで、

何かを成し遂げた実業家もいなければ、

発明も創作も改革も進化も、

すべてはその人の体を使って、

天がなさしめたものである。

元より個人のものなどない。

個人はない。

それをあると勘違いしてしまった所から、

人間の過ち、苦悩、迷い、争いがうまれた。

人はひとりで生きている存在ではない。

みなだれしも、

神霊に生かされて生きているものである。

この事実を伝えようと、

何か使えるものはないかと思渡した。

枠にとらわれないものはないか？

誰の心にも響くもの、

なににも縛られず、

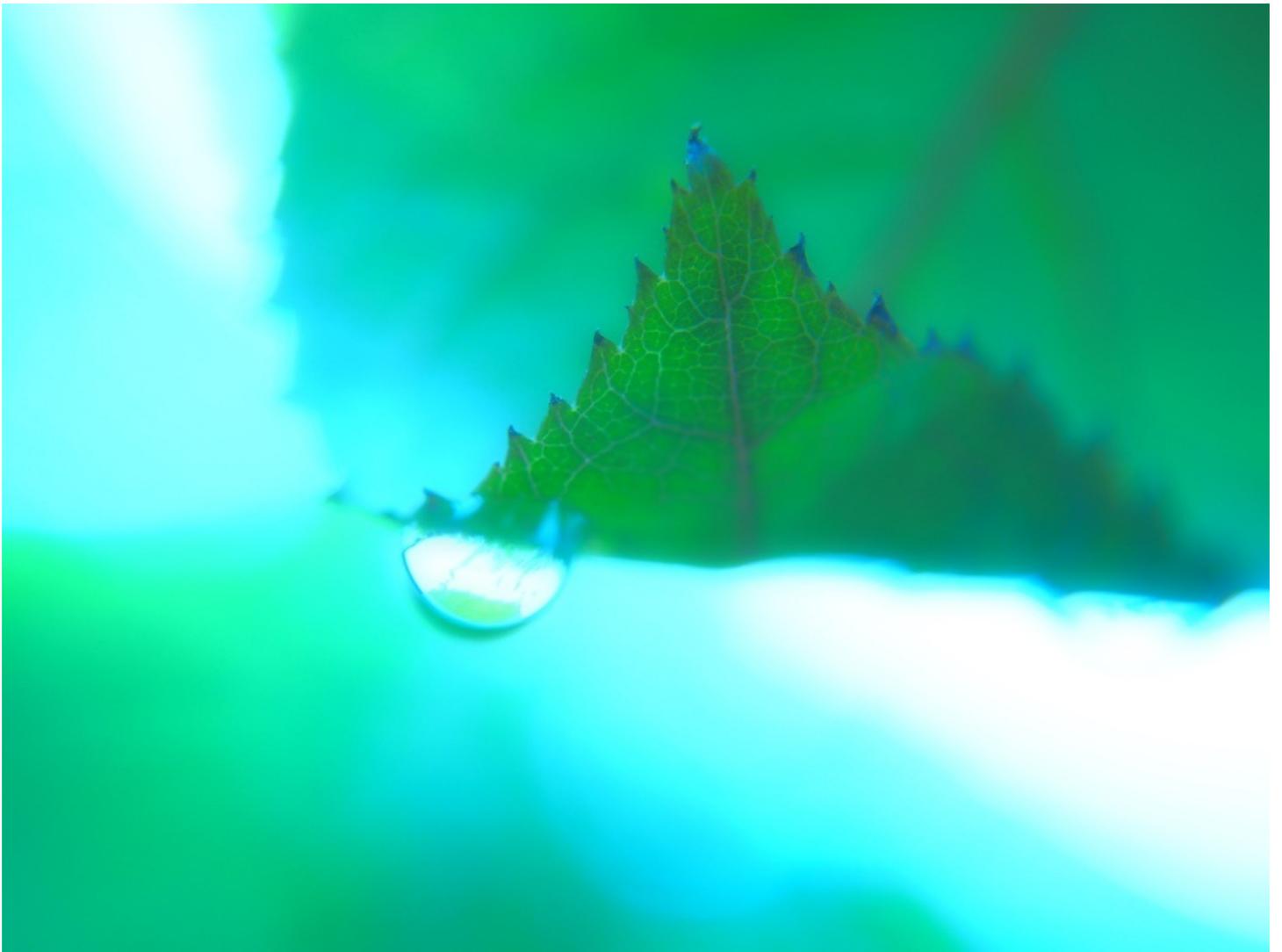
懸念されずに活動できるなにか・・・

芸術活動として、

「アート」 という形を取って行けば、

どんな人の心にも響くのではないか？

そこから 「source message」 という活動が始まった。



どんな高い壁も、

どんな高い壁も、

みんなと一緒に乗り越えていける。

人は一人で生きているのではないことを、

どうやってこの世界に伝えていこうか？

お釈迦様も五井先生も、

イエス・キリストも弘法大師も、

老子も金星の長老も、

みんな一つになって働いていることを、

あなたの守護霊様も、あなたのご先祖様も、

みんな一つになってこの星の進化のために、

働いていることを、

どうやって伝えていこうか。

みな、あなたのうちにあり。

一人一人が、

天の使者なり。



ゞ金色の丘、に立ち、（イエス・キリスト）



ゞ金色の丘、に立ち、

ひとりでに光を降ろす孤高の人。

その光は民衆の心に、

天なる父の息吹を聴かす・・・

その姿は民衆の想いに、

救主の到来を期待させ、

しかしその期待は儚くも、

かの人はついに最後まで、

いずれ沈みゆく、`泥舟の王、にはならなかった・・・

その瞳は澄み切って、真にキリストの光を宿し、

その奥から、

右手に`弾劾の剣、をもち、

左手に`エメラルドの宝石、をもちて、

世に神の癒しと峻厳を与える・・・

定まりしカルマのアラナミに、

その肉身を捧げながらも、かの人は、

今もなお、

天の理想と地の定め、



イエス・キリストはどんな人だったのか、

イエス・キリストはどんな人だったのか、

その体をすべて天に捧げた所に、

聖者としての働きがある。

肉体では何事もなしえない。

すべて天の響きがこの体を支え、

天使たちとの協調によって、

どんな働きも成される。

イエス・キリストはどんな人だったのか、

体を地に下し、

人間としての感情もあった中で、

サラリと天の御心のままに、

その命を全うした姿を、

想わずにはられない。

わたしたち一人一人が、

天の使者である。

天に想いをむけよ。

その体を天に差出せ。

すべてはあなたと共にあり





住み慣れた穴蔵から、一步外に踏み出ると、

そこは、日の光、が煌き、

風が木の葉を揺らす音は、

静かな、生命のせせらぎ、となって、

彼の心に染みわたってきた・・・

、これほどまでに、

自然は美しかったのか・・・、

長年住んだこの山に、

たくさんの「生命の息吹」が宿っているということを、

彼の心が、その澄んだ瞳が、

今になって初めて観じ入る・・・

その瞳には、かつて共にした魔界の亡者はなく、

邪な色の虚光は消え去り、

ただ「瞬く光」に見入る子供のように、

「生きる感謝」に浸る老者のように、

ただ、己の内から湧き出る、

生命の温かさ、柔らかさ、優しさ、

清らかさに満ち溢れ、

鳥の鳴き声は「祝福」に聞こえ、

風に揺れる木々の枝は、

彼を抱き入る世界の優しさにも感じられる・・・

その中に溶け入ることの素晴らしさを、

ありがたさを、

彼はその二本の足で立ち、地を踏みしめながら、

空にまで意識を溶け込ませ、

広がる生命の輝きと共に、

その 〴〵 日の中、に見い出すのだった・・・

〴〵 昨日までの私はもういない・・・

私の邪な想いは、

あの方に清められてしまったのだ・・・、

彼の心の中に、

かつては憎き敵と見ていた 〴〵 釈迦牟尼、が、

〴〵 燦然とした光、を纏って輝いているのを、

目を閉じればすぐそこにいるかのように感じられた・・・

〴〵 生まれ変わったこの命、

私はもう、この場所に戻ることはない・・・

山を降り、あの方の 〴〵 御働き、の末端にでも、

この命を使って頂きたい・・・

今やっと、この命をお返しして、

御仏の足元からでも使って頂きたい・・・

彼は山を降りるべく、

〴〵仏弟子の一步、を踏み出した・・・

目にみえる景色は彼の心に、

もはや今までのような、

〴〵形としてあるだけの物、には映らなかった・・・

踏みしめる大地一步一步から、

〴〵躍動する世界の理（ことわり）、が感じられ、

周りの木々植物、虫、動物からは、

〴〵祝福する天の意志、が感じられ、

空は澄みわたり、

差す〴〵日の光、から、

それらはすべて、

己の中にある世界にも感じられる・・・

おなじ光を宿し、

そこから種々の色を放たれ、

この世界を彩る様々な生命たちが、

彼の心に涼しく高らかな響きとなって、

流れてくるのだった・・・

仰ぎ見て、

空に広がる仏性の、

端からでも働きたくに、

心に響くそのままを、

歩み、としてお返ししたく・・・



娑毗羅（しゃびら）

かつてお釈迦様が過ごした地に、

しゃびら
娑毗羅という男がいた。

彼はその身を外道に落し、

念力や呪術の類を用いて、

魔界の亡者と化していた。

幾度も釈迦牟尼を狙うその亡術は、

ことごとく彼に撥ねかえり、

やがては病床の身となって、

己の無力さを思い知らされた・・・

病と共に業想念は清め去り、

その霞を祓うように、

ゝ釈迦牟尼ゝの尊様が、

彼の脳裏にありありと浮かんできた。

ゝ昨日までの私はもういない・・・

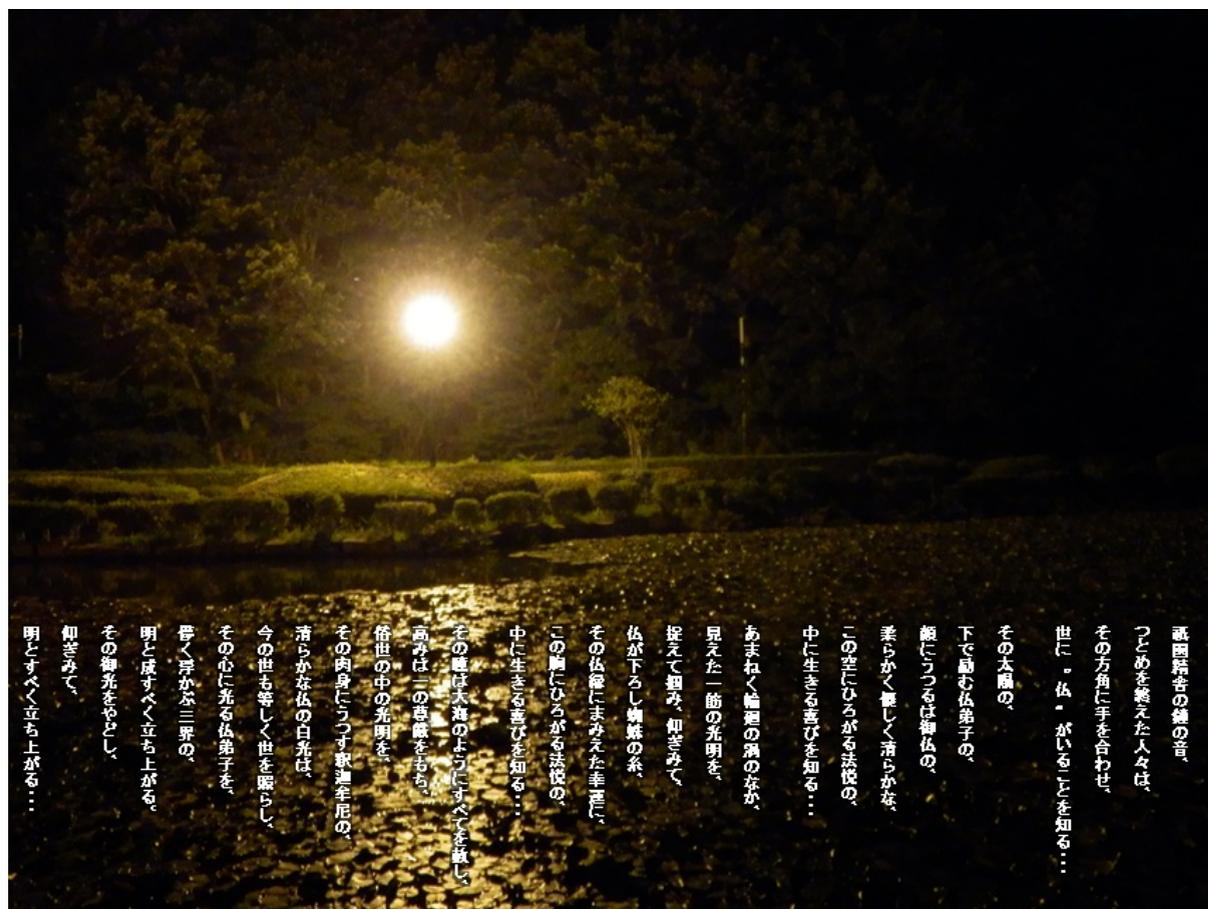
私の邪な想いは、

あの方に清められてしまったのだ・・・ゝ

仏弟子の一步を、その山蔵から踏み出し、

祇園精舎の門をたたくことになる。





祇園精舎の鐘の音、

つとめを終えた人々は、

その方角に手を合わせ、

世に、仏、がいることを知る・・・

その太陽の、

下で励む仏弟子の、

顔にうつるは御仏の、

柔らかく優しく清らかな、

この空にひろがる法悦の、

中に生きる喜びを知る・・・

あまねく輪廻の渦のなか、

見えた一筋の光明を、

捉えて掴み、仰ぎみて、

仏が下ろし蜘蛛の糸、

その仏縁にまみえた幸運に、

この胸にひろがる法悦の、

中に生きる喜びを知る・・・

その瞳は大海のようにすべてを赦し、

高みは一の尊厳をもち、

俗世の中の光明を、

その肉身にうつす釈迦牟尼の、

清らかな仏の白光は、

今の世も等しく世を照らし、

その心に光る仏弟子を、

夢く浮かぶ三界の、

明と成すべく立ち上がる。

その御光をやどし、

仰ぎみて、

明とすべく立ち上がる・・・







風をその体に纏い、一人の人が、
丘の上からこの世界を眺めていた...

◦花◦は生き生きと、

生まれた◦喜び◦を風と共に歌い、

◦水◦はこの星を流れるままに、

美しくその◦姿◦を輝かせている...

◦虹◦が空がる姿を眺めたあなたは、

時の流れを感ぜさせたら、◦日曜◦たち...

喜びを吐いて、◦水車◦を廻すあなたは、

この星の未来をその瞳に写しながら、

あふためて、◦星の輝き◦を眺めるあなたは、

彼はその◦昔◦を懐かしむあなた...

ひびく風を聴けば、

たがみが、◦鼓動◦はははははは、

すべの元となる、◦光◦は輝き...

ひびく風を吐けば、

それはすてに宿る、◦風◦となつて、

この大地の上を吹き抜ける...

花を眺め、

木々を眺め、

丘と共に、

空を眺めながら吹き抜ける風は...

落ちた心はあなたのままだ、

静かにその瞳を開けると、

変わらぬ自然の姿しだが、

彼を安心させな...

これから先、

どんなことがあっても、

この空は、

私たちが信じているのを待たせな...

◦光◦をその身に抱き、

私たちが信じているのを待たせな...

彼の瞳は、

この先の、◦星の輝き◦が写り、

写して来た、

そ「が」り、◦星の輝き◦を眺め、

彼がまた風を纏い、丘の上から歩き出した...

生命の心はそのまま美しく、
そ「が」り、◦星の輝き◦を眺め、

そのことを知るために、

人々はその生命を、◦天の星◦を眺め、

手探りで、◦星の輝き◦を眺め、

◦星の輝き◦を眺め、

不安を恐れ、

時に怖ろしく生まれながら、

人が、◦星の輝き◦を眺め、

そ「が」り、◦星の輝き◦を眺め、

苦しみの果てにたどり着くものは、

私たちが、◦星の輝き◦を眺め、

深く知り、信じているからだ...

敵を、◦星の輝き◦を眺め、

やがてはその、◦星の輝き◦を眺め、

手を取り合ふ時が来るだろう...

自然の中でみんなが歌い合ひ、

それは、◦星の輝き◦を眺め、

色とりどりの、◦星の輝き◦を眺め、

共に歌い、手を取り合ひ、

もう一度、私たちが待っていてくれなさい、

大地に向かって、

この輝きを掲げる、

皆が待ち望んだ、

その、◦星の輝き◦を眺め、

丘の上から一人の人が、

空に想いを馳せて見上げていた...

この、◦星の輝き◦を眺め、

私たちが信じているのを待たせな...

光をもう一度取り返し、

想い出し、

皆で掲げて戻ってくる、

◦星の輝き◦を眺め、

彼はまた風を纏い、

丘の上から歩き出した...

風をその体に纏い、一人の人が、

丘の上からこの世界を眺めていた...

◦花◦は生き生きと、

生まれた◦喜び◦を風と共に歌い、

◦水◦はこの星を流れるままに、

美しくその◦姿◦を輝かせている...

虹、が架かる空を飛ぶ鳥たちと、

時の流れを感じさせない 白雲、たち・・・

碧い宝石として 永劫、輝くであろう、

この星の未来をその瞳に写しながら、

あらためて この星に生きる喜び、を、

彼はその 体、いっぱい感じていた・・・

ひとつ息を吸えば、

たちまち 意識、は空を越え、

すべての元となる 光、に還り・・・

ひとつ息を吐けば、

それはすべてに宿る 風、となって、

この大地の上を吹き抜ける・・・

花を撫で、

木々を愛で、

鳥と共に、

空を遥かに吹き抜ける風に・・・

落ち着いた心そのままに、

静かにその瞳を開けると、

変わらぬ自然の眩しさが、

彼を安心させた・・・

これから先、

どんなことがあろうとも、

この空は、

この大地は、

私たちに観られるのを待たせよう・・・

〴〵光〵をその身に掲げ、

私たちが戻ってくるその〴〵時〵を・・・

彼の瞳に、

この先の 一瞬の憂い、が写り、

そしてまた、

そこから またたき、ひろがる金色（こんじき）の光を、

宿し、想うのだった・・・

生命（いのち）はそのままで美しく、

そこになんの欠けたるものはない・・・

そのことを知るために、

人々はその生命を 灰色のベール で覆い、

手探りで 真の答え、を探す旅に出る・・・

傷つくことを体験し、

不安と恐れ、

時に憎悪に苛まれながらも、

人が 探すこと、を止めないのは、

そこにこそ、生命が輝く、ことを知っているからだ・・・

苦しみの果てにたどり着くものは、空虚、ではないことを、

そしてその先にあるものこそ、

私たちが、愛してやまないもの、だということを、

深く知り、信じているからだ・・・

敵を、演じる、人々も、

やがてはその、幻、に気づき、

手を取り合う時がくるだろう・・・

自然の中でみんなが歌い会う、時、

それは、星のシンフォニー、

奏でる、は共にこの星の舞台を任された、

色とりどりのゝ演者たち、・・・

共に歌い、手を取り合い、

もう一度、私たちを待っていてくれた空に向かって、

大地に向かって、

この輝きを掲げるゝ時、こそ、

皆が待ち望んだゝ希望の光、なのである・・・

そのゝ一瞬、を、

丘の上から一人の人が、

空に想いを馳せて見上げていた・・・

この一瞬のために空と大地は、

そのゝ光、を、

私たちに観られるのを待たせよう・・・

光をもう一度取り戻し、

思い出し、

皆で掲げて戻ってくるゝ時、を・・・

ゝ希望、をその瞳に宿し、

彼はまた風を纏い、丘の上から歩き出した・・・



この体を使っている存在が上にいる、

そう漠然と感じながらも、

今までわからなかった私の本体が、

ある時を境に強く表面に現れてきた。

それからの私の歩みは、

ただ天の命のまま、

私の本体からの働きに任せることになった。

ゝ古に憂い、託すもの、は、

古代文明の頃を表現したものであるが、

それは後に作る『ライトワーカーへの手紙』で、

説明することにする。

これからはもっと、

こんな自己満足な内容ではなく、

癒しや安らぎに満ちた、

そんな天使たちの言葉を綴っていければと思います。

2015年5月3日 0時49分 月



source message

～ 天と地 ～

SOU

souのライブラリー : <http://p.booklog.jp/users/source-message>

ブログ : <http://ameblo.jp/source-message/>

プロフィール : <http://profile.ameba.jp/source-message/>

コメントはこちらへ... : <http://booklog.jp/edit/3/97653>

souへ直接のお問い合わせ...

<https://mailform.mface.jp/frms/sourcemessage/2c29j53an5i0>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/97653>